

## 肉用および卵用名古屋コーチンの開発と普及

愛知県農業総合試験場 木野 勝敏

### 1. 名古屋コーチンの誕生と歩み

名古屋コーチンは、明治初期、旧尾張藩士の海部壮平、正秀兄弟が、尾張地方の地鶏とバフコーチンの交配により誕生した。明治 36 年には愛知県農事試験場に畜産部が設置され、以降愛知県は、名古屋コーチンの系統としての確立と産卵性能の改良を継続した。最盛期には年間 500 万羽が生産され、白色レグホーン種との一代雑種が普及されるなど、愛知県のみならず日本の養鶏産業を牽引したが、昭和 38 年の外国種鶏の導入開始によりその活躍の場を失い、昭和 40 年代には当场で維持するのみの存在となっていた。

### 2. 肉用名古屋コーチンの開発と普及

昭和 40 年代末、肉用鶏としての再開発が開始され、10 年余の歳月を費やし体重を改良前の 1.5 倍に増加させた肉用系統が造成された。昭和 59 年から、この肉用系統と以前からの肉用系統を交配したものがコマーシャル鶏として供給開始されたが、卵用系統との交配で生産性が低下し、普及の拡大にはさらなる生産性の改善が望まれた。そこで第 2 の肉用系統を造成すべく、県外で飼育されていた名古屋コーチンも育種素材に加えて、大型で胸張りの良い鶏を 7 世代にわたり繰り返し選抜した。その結果、生産性は最初の肉用系統を凌駕し、平成 3 年には 2 つの肉用系統の交配により体重や正肉量が約 20% 改善された新肉用名古屋コーチンを開発・普及した。この新肉用名古屋コーチンは生産コストの低減に大きく貢献し、その後順調に生産羽数を伸ばし、現在、年間に約 110 万羽が生産されている。

### 3. 卵用名古屋コーチンの開発

名古屋コーチンの卵は、卵黄が濃厚で舌触りが良く、また卵白も弾性に富んでおり、高品質鶏卵としての需要が期待できるものであった。しかし肉用鶏としての改良により体格が大型化、また産卵性も低下していたため、新たな卵用系統の造成に着手した。7 世代による選抜を実施し、従来よりも小格で(-7%)、早熟(-8日)かつ多産な(+6%)卵用系統を開発した。さらに他鶏種卵との外観上の差別化を図るため、名古屋コーチン卵の特徴である「さくら色」の卵殻色を際立たせるとともに、白い斑点の付着、さらにその斉一性の改善でも成果を上げ、高品質特殊卵としての地位を確立した。この系統を交配して生産される卵用名古屋コーチンは平成 12 年春より普及が開始され、現在、約 6 万羽が普及している。名古屋コーチンの卵は生食用として利用される他、惣菜や洋菓子等の加工原料としても利用されている。